

# 戦後期の国語教育目標における 「習慣」と「態度」をめぐる概念

小久保 美 子

## 1. 研究の目的と方法

昭和26年改訂版『中学校高等学校 学習指導要領 国語科編 (試案)』には、新教育の理念について、以下のように記されている。

新しい教育では、すべての教科について、習慣・態度・技術・能力などということがいわれているが、国語科においてもやはり同様である。……聞くこと、話すこと、読むこと、書くことは、みな一種の技術であって、技術として学習され、指導されなければならない。それは、精神的にして同時に身体的な習慣・態度であるから、特に、小学校低学年の発達段階では運動感覚のおよび視覚的、聴覚的な訓練も必要である。そしてことばを使う習慣・態度・技術・能力を正しく設定して行くために、ことばに対する鑑賞力を増し、知識や理解を深めなければならない。これからの国語教育では、こうした習慣・態度・技術・能力・鑑賞・知識・理解の一面に偏することなく、常に全体を目がけて、言語生活の理想を高めていかなければならない<sup>1</sup>。(下線引用者。以下、断りない限り同様。)

「習慣、態度、技術、能力」は、戦後においてとくに強調された概念であり、アメリカの新教育理念の影響を受けたものである。これらの語句は、早くも、昭和22年度の『学習指導要領 一般編 (試案)』の「第五章 学習結果の考査」<sup>2</sup>において見られる。

さて、この意味で考査の方法を見渡して見ると、そこには、極めてたくさんの種類を見出すことができる。まず、学習の目標とするところから、

知識の有無正否を調べるもの

考え方や見方の理解を調べるもの

技能の状態を調べるもの

熟練の状態を調べるもの

態度の如何を調べるもの

鑑賞力を調べるもの

を区別することができる。

安彦忠彦は、これらについて、「学習の目標とするところ」に応じて、以上、「六つの能力をあげている」とし、学力観の立場から次のような批判的見解を述べている。

ただ羅列的に並べられているのみで、相互の関係については全く構造化されていない。しかも、学校で「何を」教える(べき)かという教育内容との関連も全く考

慮されていない<sup>3</sup>。

国語科の前掲の学習指導要領試案では、一応関連的な説明がなされているとはいえ、その内実は明らかでない。

倉澤栄吉は、能力のとらえ方に着目しながら、以下のように述べている。

従来は能力を、知識、理解、技能、態度、習慣などと分けて考えてきた。……これも一つの分け方であるけれども、わかりにくく（理解と知識の差とは？）（態度と習慣の差とは？）そのうえ理想、鑑賞などが入るといよいよわかりにくい<sup>4</sup>。

とし、自己の立場から能力表作成の要諦について論及している。しかし、理解と知識の差、及び態度と習慣の差については、指摘に止まりさらなる追究は行っていない。

では、これらの源となっていると思われるアメリカの新教育論において、「習慣、態度、技術、能力、鑑賞」は、一体どのような内容をもったものとしてとらえられていたのだろうか。また、それらは、どのような関連性をもっていたのだろうか。本稿では、そのことを明らかにするために、「1940年代のアメリカの文献」を基にしながら考察を進めることにしたい。併せて、昭和26年改訂版『学習指導要領 国語科編（試案）』での日本の取り上げ方との比較を通して、わが国の新教育理念の受容上の問題点を明らかにしたい。

## 2. 国語科の一般目標設定の背景

昭和26年改訂版『小学校学習指導要領 国語科編（試案）』（以下、『26年版国語科編（試案）』と記す）の一般目標は、以下のような文言によって示されている。

以上のような役割をもったことばを効果的に使用するための習慣と態度を養い、技能と能力をみがき、知識を深め、理解と鑑賞とを増し、国語に対する理想を高める<sup>5</sup>。

この目標は中学校・高等学校にも共通しており、目標に対する考え方は、前項の冒頭に引用した通りである。また、これらの語句は、前述したように、国語科だけの用語ではなく、『学習指導要領 一般編（試案）昭和22年度』の「考查」の章においても見られ、さらに、『学習指導要領 一般編（試案）昭和26年改訂版』（以下、『26年版一般編（試案）』と記す）では、以下のように、教育目標として登場する。

小学校の児童は、まだ心身の発達がじゅうぶんでないから、むずかしい論理や高い技能をこれに求めることはできない。ここでは、心身の発達に応じた初等普通教育が目ざされる。すなわち、普通の社会人に必要と考えられる知識・理解・態度・習慣・技能・鑑賞の初歩的なものを身につける段階であるといえる<sup>6</sup>。

一般編と国語科編とを見ると、まず語句の提出順が異なっていることに気づく。また、一般編には、「能力」の語が提出されていない。これらの差異がどこから生じたのか、またその差異は教育上どのような意味を持つのかについては検討するすべがなく、指摘に止まらざるを得ないが、少なくとも、一般編では、倉澤や安彦の言うように、「能力」を「知識・理解・態度・習慣・技能・鑑賞」を含む包括的な概念として捉えていた

ために、「能力」の語句を提出しなかったとの見方もできる。それに対して、『26年版国語科編（試案）』では、「技能と相対する能力」を想定していたことがうかがえる。なお、国語教育における「能力観」については、石森延男<sup>7</sup>や倉澤等は、包括的な上位概念としての能力観を有し、習慣や態度の形成を重要な国語学力と見て主張したが、興水実は、『26年版国語科編（試案）』で示されたような狭義の能力観を重視した国語教育論を展開し、必ずしも共通の見解に立っていたわけではない。

さて、先に、これらの用語はアメリカの新教育の考え方の影響を受けたものであると述べたが、実は、日本の新教育に影響を与えたCIE（民間情報教育局）のサゼッションの中に、これらの語句を見出すことができる。以下のサゼッションは、『22年版国語科編（試案）』を編集する際に、CIEのメンバーであったヘファナン女史が、22年6月3日の編集委員会において与えたとされているものである。

（原文）

Language must function in a social situation. Therefore social studies, science, art, and every experience in the school curriculum must be used in working out the curriculum in the language arts. Each social studies unit will contain much material and activity of value in developing some of the necessary knowledge and understandings, habits and skills, attitudes and appreciations in language arts<sup>8</sup>.

この原文を興水実は、次のように訳している。

言語は社会的状況の中で働くものである。それ故に学校が提供するあらゆる経験が、国語の教育課程を実施する一つの機会である。社会科の方の統合された教育課程は、国語の方の必要な知識、理解、習慣、技能、態度、鑑賞のあるものを発展させる価値のある多くの材料と活動とを含んでいる<sup>9</sup>。（後略）（旧漢字は新字体に改めた。）

原文は、「knowledge and understandings」「habits and skills」「attitudes and appreciations」というように二語が「and」で結ばれ、三つのまとまりに分けられている。それに対し、興水は、「知識、理解、習慣、技能、態度、鑑賞」というように、一語一語を独立させて訳している。なお、興水は、『26年版国語科編（試案）』における国語学習指導の目標を次のように解釈している。

国語学習の目標は、ことばの使用を効果的にすることであって、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことに関して、好ましい習慣、態度、技術、能力を養い、必要な理解、知識を増すことである。（中略）

習慣、態度、技術、能力、理解、知識は、習慣と態度をいっしょにし、理解と知識をいっしょにすることができる。特に、技術と能力とをいっしょにして技能と呼ぶこともできる。即ち、二つずつ三つにされる<sup>10</sup>。

興水の国語学習の目標に関する日本語の表現では、サゼッションで示された「習慣と技術」「態度と鑑賞」という二語ずつのまとまりとは異なり、「習慣と態度」「技能と能力」とがいっしょになっている。また、「鑑賞」の語句がなく、「能力」の語句が入って

いる点も注目すべきところである。この両者の差異は、次の三つの点で見逃すことができない。すなわち、第一に、国語教育における「習慣」及び「態度」の内容はどのようなものとしてとらえればよいのか。またそれらの形成についてはどのように考えればよいのか。第二に、「技能」・「鑑賞」はどこに、どのように位置付くのか。第三に、国語の「能力」の内実は何なのかである。

第三の「能力」については、先ほど指摘したように、『26年版一般編（試案）』の教育目標やサゼッションには入っておらず、興水の目標解釈のところで「技能・能力」と並列的扱いで出てくるというずれがあるため、ここでは検討の対象から外すことにしたい。本稿では、第一と第二の点について論じていくこととする。

果たして、アメリカのサゼッションが示している「習慣と技術」「態度と鑑賞」というまとまりには、確たる意味はないのであろうか。わが国の『26年版国語科編（試案）』のように、「習慣と態度」「技能と能力」というようにまとめ、「鑑賞」を別枠にするという考え方は、アメリカの考え方と齟齬をきたすことにはならないのであろうか。

以下、これらの疑問に答えるために、当時のアメリカのコース・オブ・スタディ（以下、COSと記す）関連の文献を見てみることにしよう。ヘファナンのサゼッションの原典を見出すことはできなかったが、サゼッションと大変よく似た内容の記述を、イリノイ州の初等学校 COS（1946）の Language Arts の冒頭部分に見出すことができた。イリノイ州は有数の教育州として知られていると当時の文献で紹介されている<sup>11</sup>。また、イリノイ州 COS の編集者の一人に進歩的な指導者であったラッセル<sup>12</sup>の名が見られる。さらに、デューイの実験学校のあるシカゴ市を有していたことをも考え合わせれば、イリノイ州 COS は、経験主義の考え方を色濃く反映しているものと想定でき、経験主義の理念を探究するには好個の資料といえよう。

*Language is a means of communication. It can function only in a social situation. Therefore, reading, oral and written language, spelling and handwriting are interdependent and must utilize and support each other. (中略) They must implement and make meaningful his learnings in social studies, in science, in the arts and in mathematics. Every unit of work in these subjects contains, in turn, materials and activities which can contribute to the desired knowledge and understandings, habits and skills, attitudes and appreciations in the Language Arts<sup>13</sup>.*

ヘファナンは、カリフォルニア州初等教育課長で熱心なデューイ信奉者であったといわれているが、ヘファナンが与えたサゼッションにもイリノイ州の COS にも、「knowledge and understandings」「habits and skills」「attitudes and appreciations」とあることから、このように二語を連ねて示している場合には意味があると見るのが妥当なように思われる<sup>14</sup>。次項では、その意味について、考察を進めることにしたい。

### 3. 「習慣と技能」の意味

「habits and skills」(または、「skills and habits」)と示されている箇所を見てみるこ

にしよう。先のイリノイ州 COS の第 7 学年 Reading and Literature の単元では、発達させるべき「skills and habits」として、以下の内容が挙げられている<sup>15</sup>。(和文は小久保の抄訳。以下、断りない限り、訳文はすべて小久保による。)

1. Reading orally with expression, keeping the voice low and pleasant but so all can hear.  
(小さく楽しそうな声で、皆に聞こえるように、表現しながら音読すること)
2. Reading on level of ability. (能力に合ったレベルで読むこと)
3. Reading for understanding. (理解するために読むこと)
4. Increasing reading rate. (読む速さを増すこと)
5. Using good English in all oral work.  
(すべての音声活動において、正しい英語を使うこと)
6. Listening attentively while others are speaking.  
(他の人が話しているのを注意深く聞くこと)
7. Organizing material for oral reports.  
(口頭報告のために資料を組織すること)
8. Learning meaning, use and spelling of many new words.  
(多くの新しい語の意味、使い方、綴りを学習すること)
9. Spelling correctly all words in copying poems.  
(詩を写すときにすべての語を正しく綴ること)
10. Punctuating, capitalization, and spacing of poems.  
(詩において、句読点を打つこと、大文字を使用すること、空間をとること)
11. Using good writing position for ease in writing.  
(書きやすい正しい書写の姿勢に慣れること)
12. Using correct letter formation so that all written work was legible.  
(すべての作品が読みやすいように、正しい文字表記にすること)
13. Developing speed in writing. (書く速さを発達させること)

また、イリノイ州 COS や以下に示すカリフォルニア教師用手引き書(本書は、占領期にヘファナンの手によってわが国にもたらされた。)の参考文献として挙げられている、NEA の *Language Arts in the Elementary School* (本書もまた、IFEL 文庫<sup>16</sup>に収められていることから、当時わが国に入ってきたものと見られる。)における第五学年の単元例にも、「Habits and skills」の項が出ている。そこで押さえられている内容は、以下の通りである<sup>17</sup>。

Habits and skills :

The effective use of the Classroom Library (教室文庫の効果的使用)

- a. Caring for books (本に関心を持つこと)
- b. Classifying books (本を分類すること)
- c. Making bibliographies (著書目録を作成すること)

The locating of data (データを収集すること)

- a. Using table of contents (内容一覧を利用すること)
- b. Reading rapidly to locate needed data  
(必要なデータを探すために速読すること)
- c. Using index effectively (インデックスを効果的に使うこと)
- d. Using chapter headings, notes, keys, and footnotes  
(章の見出し・注・記号・脚注を使うこと)

Organizing information (情報を組織すること)

- a. Giving central idea of selection (情報を選択した主旨を表明すること)
- b. Summarizing (要約すること)

Evaluating Material (資料を評価すること)

- a. Selecting materials appropriate for discussion, debate, dramatization  
(議論、ディベート、劇化のために適切な資料を選択すること)

当時、わが国にも入ってきた *Encyclopedia of Modern education*<sup>18</sup> における「習慣 (habits)」の項には、以下のように記されている。

The meaning of habit includes the idea of facility in the performance of an act combined with a persisting inclination toward a repetition of the act. The emphasis may in one case be on the skill of performance and in another upon the motivation to act, but neither aspect is excluded in typical habits<sup>19</sup>.

(習慣は、行為を何度も繰り返すことによってもたらされる行為を行う際の器用さという意味も含んでいる。そして、一つは、遂行の技能、もう一つは、行為に対する動機づけが重要視されており、典型的な習慣においては、どちらの様相も排除されてはならない。)

さらに、

Since motivation and skill are both functions of the environment as well as of the learner, habits are established most readily when the environmental conditions support their acquisition and maintenance.

(動機づけと技能は学習者だけでなく環境の二つの機能だから、習慣は、環境的な条件が習慣の獲得や維持を支援するときに最も容易に定着する<sup>20</sup>。)

とある。つまり、習慣形成には、習慣の二つの大事な要素である動機づけと技能にかかわる環境的な条件が必要なのである。そして、それには、行為を繰り返そうとする傾向が維持されなければならないのである。

学習論に下ろせば、学習者に動機づけと技能を与えうる環境条件の設定、すなわち「場」や「状況」(situation)が必要になるということである。逆の見方からすれば、「場」や「状況」が設定されておらず言語経験が行われなかったところでは、習慣は形成されないということになろう。前掲のカリフォルニア州の教師用引き書には、「教師は、適切な経験を与えることによって、子どもたちが技能と習慣を獲得するのを助けることができる<sup>21</sup>」と明瞭に述べられている。また、わが国の新教育に最も影響を与えたとされている

るバージニア州 COS には、「技能 (skills) を実践する場が現実のもので、技能の実践の必要性を子どもが鮮明に十分に感知しているならば、獲得を保証するための取り立て練習は、些かも、あるいは全く必要としないだろう<sup>22</sup>。」とまで言っている。

また前掲の辞典の説明において、習慣が含意している行為遂行時の技能は、動機に裏付けられた行為の反復と結びついているといった考えが示されていたが、学校教育において、実践的に繰り返しが可能になる場というのは、学校生活全体を通すより他にない。国語科において意味のあるスキルの実践の場を繰り返し設定することはもちろん必要であるが、習慣化を図るには、それだけでなく社会科や理科等の内容教科と密接な関連を図りながら有意義な場で言語技能を獲得させていくべきで、これが国語科の特性の一つである。

上述のように考えられなければならない「習慣と技能」が切り離されてしまうことにより、場を離れた技能の取り立て指導が優位に立ち、経験を通しての技能の習慣化という側面がおろそかにされてしまえば、国語科本来の目標が達し得ないことになるであろう。

#### 4. 「態度と鑑賞」の意味

さて、「態度 (attitudes) と鑑賞 (appreciation)」は、どのような関係にあるのだろうか。その考究に進む前に、まず、「習慣」と「態度」の違いについて考えたい。同じくイリノイ州 COS の、第 7 学年及び第 8 学年の「Abilities」の項では、「Habits」「Attitudes」を明確に区別して述べている<sup>23</sup>。以下、第 7 学年について見てみることにしよう<sup>24</sup>。

<第 7 学年>

Habits of :

1. Speaking clearly and distinctly in orderly sentences.  
(順序正しくはっきり正確に話す)
2. Using voice effectively. (効果的な声の使用)
3. Using acceptable grammatical forms. (適当な文法形の使用)
4. Using accurate punctuation, spelling, and penmanship.  
(正しい句読、綴り字、習字の使用)
5. Using dictionary efficiently. (効果的な辞書の使用)
6. Co-operating by listening and contributing in all conversation and speaking situations.  
(すべての話の場面によいきき手となって協力し貢献する)
7. Using automatically all skills acquired in earlier language training.  
(すでに学習した技能が倉澤は「技術」の訳—引用者注>を自動的に使うようにする)

Attitudes of :

1. Taking pride in workmanship, neatness, accuracy and orderly arrangement.  
(手際よさ、きれいさ、正確さ、順序正しさにほこりを持つ)
2. Appreciating the help which knowledge of grammar gives in enabling one to

speak and write more effectively.

(文法の知識がはなしかた、かきかたにより効果を与えるということを感じる)

「態度」とは、「～にほこりを持つ」「～を感じる」あるいは、「～に対する意識的な注意 (Conscious determination to ～)」「～への思いやり (Consideration for ～)」(第8学年)などの、心構え、心的傾向のことをいう。したがって、一定の学習過程を経て獲得され定着した行動パターンが、特定の刺激に応じてほぼ自動的に生起する「習慣」とは明らかに区別されるべき概念である。

わが国の『26年版国語科編 (試案)』には、「～の習慣と態度」という言い方がしばしば見られる。しかし厳密に言うなら、その表現は適当ではない。なぜならば、「～」の部分に示された一つの内容を概念の異なる語句が同時に受けるというのは、正しい述べ方とはいえないからである。例えば、「生き生きとした話をしようとする習慣や態度」(『26年版小学校国語科編 (試案)』p.15)「独創的に書こうとする習慣と態度」(同 p.16)という表現が見られる。「生き生きとした話をしようとする」や「独創的に書こうとする」というのは「態度」であって、「習慣」と言うことはできない。なぜなら、「生き生きとした話」や「独創的な作文」が自動的に生起するなどということはあるわけがないからである。それらは、場や相手に応じて異なってくるものである。ただ、「場に応じて、いつもそのような態度をとろうとする」という、いわば、「態度が習慣化される」ということはあろう。わが国の『26年版国語科編 (試案)』の場合も、そのような意味合いで表現をしたのだという解釈を全く否定することはできないが、少なくとも上記の引用箇所からは、そのような厳密な考え方をうかがうことができない。やはり、『26年版国語科編 (試案)』の作成に関わった国語教育関係者等が「習慣」と「態度」について明確な概念の違いをもって表現していたとは考え難い。

では、本項の主たる論及課題である「態度と鑑賞 (attitudes and appreciations)」は、一体どのような関係にあるのだろうか。

カリフォルニア州の教師用引き書である *Manual for Teachers*. Santa Clara County Curriculum では、全教科にまたがる「基礎的な鑑賞」の項において以下のように述べている。

鑑賞の特性は、感動 (affective) であり、言うならば、それらは、感受性 (feelings) と 情動 (emotions) を含んでいる。……何と言ってもまず、ある経験に関する子どもの鑑賞は、子どもに、喜び、経験への積極的態度、同種の経験を続けようとする方向を与える。……そのような鑑賞 (力) は、命じることのできるものでもないし、強制できるものでもない。それらは、好ましい状況 (conditions) の結果である<sup>25</sup>。

さらに、具体的事例として、詩の鑑賞を挙げ、「詩を読むたびに楽しむ子どもは、さらにたくさんの詩を読むだろう。その子どもの楽しみは、測りしれないし、説明することさえできない<sup>26</sup>」と述べている。

このように、「鑑賞」は好ましい状況下にある経験の結果として、つまり、子ども自身が経験を十分に楽しんだ結果として、子どもの内から生じるものであり、教師が外側か



ら与えられるものでは決してない。そして、その鑑賞の経験が、同種の経験をさらに続けようとする積極的態を生み出すのである。約言するならば、「鑑賞」が「態度」を生ぜしめるのである。先に掲げたイリノイ州 COS 第7学年の「態度」の項の2つ目、「文法の知識がはなしかた、かきかたにより効果を与えるということを感じる (appreciating)」ということに触れていけば、「効果的に話したり書いたりするために文法の知識が役に立つのだということをしみじみと感じる」という経験が必要なのである。それは、鑑賞ともいえる味わいである。つまり、文法的知識の効用を子どもが内から実感することが大切なのであり、その実感が、効果的に話したり書いたりするために文法の知識を応用しようという態度を生むのである。したがって、「態度と鑑賞」は、やはり関連性をもった概念であり、「態度形成には鑑賞経験が大きく関わるのだ」という考えをもつことが、教育上大変重要であるといえる。

## 5. 新教育理念受容上の問題点

このように、「習慣と技能」「態度と鑑賞」という相互の関連を考えずに、「習慣」と「態度」両者の概念を曖昧にして用いてきたことが、国語教育の実践上どのような影響を与えたかについては、別途、具体的実践を用いて明らかにする必要があり、それは今後の課題としたい。しかし概括的に言うならば、わが国では、習慣や態度形成を儀的なもの、道徳的なものとして捉える傾きがあったように思われる。

「習慣」「態度」の形成に関する問題は、実は、学習指導方法、カリキュラムに直結する問題、すなわち、「価値ある経験を与える」という経験主義の根幹を為す教育理念に関わる問題である。これまで考察してきたように、「習慣」「態度」が、それぞれ「技能」及び「鑑賞」と密接な関わりを持つとするなら、なおのこと、どのような場で、どのような学習活動を経験させれば、「技能」の獲得につながり、「鑑賞」を個々人の心の内に生ぜしめることができるのか、あるいはまた、個々人の心の内に生じた「鑑賞」をもって、さらに同種の経験を自ら重ねようという積極的な態度を促すことができるのかという、まさに教育内容及び教育方法上のことがらを抜きにしては語れない問題なのである。

デューイ研究に目を向けた道徳教育研究などにおいては、以前から「習慣」の概念の重要性に着目した研究が見られる<sup>27</sup>が、国語教育においては、その後も「習慣」と「態度」を明確に区別しないまま扱って今日まで至った。デューイは、「教育は言語を知性的道具 (intellectual tool) に転換しなければならぬ」とし、『『日常の事項や便宜 (affairs and conveniences)』に関係ある習慣を『『精確な概念 (precise notion)』に関係づけられた習慣へと移行させるのは困難なこと』であると述べている<sup>28</sup>。そして、「この転換作用の有効な完遂は (イ) 生徒の語彙の拡大、(ロ) 生徒の用語の一層の精確化、(ハ) 連続的談論習性 (habits of consecutive discourse—引用者注) の形成を必須条件とする」と結論づけている。ここでも、デューイは、「習慣」を鍵概念として扱っている。しかし、わが国の国語教育界において、「習慣」の概念は探究されるどころか、「態度」の中に入れられてしまい、やがてその後の学習指導要領から、「習慣」の概念が欠落していくことになる。

国語教育界が、新教育全体の流れと呼応した面があったとはいえ、能力主義へと移行してしまっただこと、その後、教科書教材文の読解中心の国語教育が長く続いたこと、そして、それらの実践が言語生活の向上に貢献することが少ないという現実的な問題を抱えながらも具体的な解決の道が得られなかったのは、新教育の理念が移入された時点で、「習慣と技能」「態度と鑑賞」、そしてそれらを包括する「能力」の概念を探究しきれずに、今日まで来てしまったことと決して無関係ではないだろう。「習慣と態度」というように、セットとして使い慣れた日常語であったが故に、却って、術語としての教育的意味を顧慮することがなかったのであろう。しかし、国語教育において、理論的にも実践的にもそのことを見逃してきてしまったことは、国語教育の伸展を長きにわたって大きく阻む結果になったと言っても決して過言ではないだろう。

経験主義国語教育の理念に孕まれていながら受容しきれなかった教育的意味を探り出すことは、総合学習の具体的展開が間近に迫った今日、それとの関連を考えないではすまされなくなった国語科教育の実践的理論を生み出して行く上で極めて意義深いことと思われる。

## 【注】

- 1 文部省 (1951) 『昭和二十六年改訂版 中学校高等学校 学習指導要領 国語科編 (試案)』 p.12
- 2 文部省 (1947) 『学習指導要領 一般編 (試案) 昭和二十二年』 pp.36-37
- 3 安彦忠彦 (1985) 『第四編 教育内容・方法論 第一章 学力論』『戦後日本の教育理論下』小川利夫 柿沼肇編 pp.5-6 ミネルヴァ書房
- 4 倉澤栄吉 (1951) 『国語教育の問題』世界社、『倉澤栄吉国語教育全集 2』 p.324
- 5 文部省 (1951) 『昭和二十六年改訂版 小学校学習指導要領 国語科編 (試案)』 p.14
- 6 文部省 (1951) 『学習指導要領 一般編 (試案) 昭和二十六年 (1951) 改訂版』 p.13
- 7 石森延男 (1949) は、ことばの能力について以下のように述べている。  
「ことば」に対する能力といっても種々な面があると考えられますが、国語教育では、それを「態度」という面、「理解」という面、それから「技能」という面からいろいろと考えていくことができます。これらの面は、いうまでもなく、別々に分けて進められるものではなく、ことばの働きとして、全一的に、有機的に考えられていかなくてはなりません。(『国語教育諸島』 pp.67-68 中央社)
- 8 石森延男 (1965) 『占領下のころ』『言語生活』五月号 1965年 p.56 筑摩書房
- 9 奥木実 (1950) 『国語科概論』 p.173 有朋堂

この指示の訳は、以下のように続いている。

作業単元というものは、子どもが一つの問題を解決しようと試みてなすところのあらゆる事をふくむ。語を換えていけば、たしかに興味をもつある問題を解決するためにいろいろな活動をする、そのときに子どもが遭遇するすべての経験から成り立っている。

このやりかたで、理解、態度、鑑賞に関する子どもの成長は強められる。そればかりでなく文化の重大な諸要素も学習される。読みかた、口頭及び文字による表現、及び書きかたというような科目は、目的に対する手段として考えられる。すべての健全な教育の目的は子どもの円満な発達である。

単元のやりかたは学習の状況に経験を提供する最上の方法の一つである。しかし国語科の教授は直接教授によっても与えられなければならない。国語の学習は、子どもが興味をもつ作業単元によっては、ただ単に部分的に成しとげられるだけである。技術を獲得し、本質的事実を加えて行くための練習が必要である。

- 10 同上書 p.147
- 11 注4に同じ p.167 倉澤は、昭和24年2月にイリノイ州を訪れている。
- 12 同上書 p.167
- 13 *Curriculum and Course of Study Guide for Elementary Schools of Illinois*. Circular Series A No.32 VERNON L. NICKEL Superintendent of Public Instruction Springfield, Illinois p.19 平井昌夫も、『アメリカの国語教育』(1950)において、本書を取り上げている。
- 14 言うまでもなく、常にこの二語が連なって叙述されているわけではない。「It is designed to extend the growth and refinement of skills, habits, and attitudes developed in the primary grades,」[developing habits, skills, and appreciations]「……so that opportunity was made for skills, as well as that desirable attitudes and habits, to develop.」などの叙述も見られる。しかし、いずれの場合にも具体的な内容を伴ってはならず、国語科の目標記述のレベルでの叙述である。本稿で問題にしようとしているのは、二語が連なって示されている場合の教育的意味である。
- 15 注13に同じ pp.68-70
- 16 IFELとは、新制大学発足後の昭和23年9月から、石井庄司が主になって、何回か続けられた「再教育指導者養成講習会」(Institution For Educational Leadership)のことである。全国の大学の先生や指導主事の研修の場になった。その講習会に何らかの関わりを持ったと見られる当時のアメリカの教育に関する文献が、「IFEL文庫」として、筑波大学体芸図書館に保管されている。
- 17 *Language Arts in the Elementary School*. TWENTIETH YEARBOOK THE NATIONAL ELEMENTARY PRINCIPAL Bulletin of the Department of Elementary School Principals, National Education Association 1941 p. 518
- 18 本辞典は、Harry N. Rivlin等によって編集され、1943年に刊行されたものである。わが国で石山脩平・梅根悟等によって編集され、1954年に刊行された『教育研究事典』(金子書房)においても、アメリカ教育学会の代表的なカリキュラム観を説明するのに本辞典が引用されており、当時のわが国の新教育の推進にとって重要な辞典であったことがうかがえる。なお、本辞典は、IFEL文庫に保管されている。
- 19 注18に同じ p.355
- 20 同上書 p.355
- 21 *Teachers Guides to Education in Early Childhood*. California State Department of Education Division of Instruction Elementary Education Sacramento, California 1950 Chapter IV Young Children Learn to speak, read, and write p.36
- 22 *Course of Study for Virginia Elementary Schools Grade I-VII*. (1943) p.232 Richmond:Division of Purchase and Printing
- 23 注13に同じ pp.93-94
- 24 この部分は、注4の書(pp.329-330)において倉澤がすでに訳出して紹介している。本項の訳は、それに依拠した。
- 25 *Manual for Teachers*. Santa Clara County Curriculum (1939) p.15
- 26 同上書 p.16
- 27 堀田裕(1964)「デューイに於ける「習慣」の概念と道徳的価値判断の問題について」『日本デューイ学会紀要 第五号』pp.31-37 春秋社、吉田恭子(1970)「デューイ道徳教育における習慣の意義」『日本デューイ学会紀要 第11号』pp.42-48
- 28 Jhon Dewey (1910) *HOW WE THINK*. p.180 D. C. HEATH & CO., PUBLISHERS  
本稿の訳は、梅田清次(1950)『思考の方法』p.244(春秋社)に依る。

(こくぼ よしこ 筑波大学大学院 博士課程 教育学研究科 人文科教育学)